

大阪の藝人

○
大阪の藝人と云つても、芝居ばかりは私はあまり上方のものを好まないのて、俳優のことはよく知らない。随分此方こちらの土地にも馴じみ、人情風俗の面白さも呑み込めて來た時分であるから、昔は蟲が好かなかつた鴈治郎も、近頃見たら大いに見直すかも知れないと思ひ、去年歌舞伎座の柿こけら茸落しに「土屋主税」が出た時は、何年ぶりかて見る此の老優がどうかして好きになれますやうにと心に祈り、開幕前から満腹の敬意と期待とを以て臨んだのであつたが、羽左衛門の大高源吾にすつかり食はれてしまつて

ゐるのがまざくと見え過ぎたのには、氣の毒とか腹が立つとかの段てはなくて、感心したいにも感心させてくれないもどかしさ、好かうとして好きになれない遣る瀬なさ、とても云つたやうなものを味はされた。それも自分が東京人であるが故に巧味が分らないのであるなら、分るまで見て好きになりたいものだけれども、廊下で遇つた北野恒富畫伯に聽けば、全く私と同じことを云ふ。腰元を先に立て、奥から出て來て、縁のところを歩いて庭前の雪景色を眺めやるのに、仰山に一方の足を爪立て、伸び上るやうな形をする、あゝ、やつぱり昔の鴈治郎だなど思つたが、北野君もあの形が嫌味であると思ひ、羽左衛門の方が段違ひによいと云ふ。大阪生れてはないが、大阪の水が育てた畫家で、關西の清方と云つてもよい人の意見がさうであるのだから、私は内々安心もすれば淋しくもあつた。さうしてもはや好きになら

うとする努力を放棄するより仕方がなかつた。たゞ、それにつけても成駒屋は仕合せな役者であるとは思ふ。二十年前の私であつたら、その仕合せを不當なものとして憎んだであらうが、羽左衛門や六代目に付き合つて貰つて大きな顔をしてゐることに多大の反感を抱いたであらうが、今では我が愛する大阪のために、理窟は抜きにして此の老優の晩年を勞はつてやりたく、その幸福が終生圓滿につゞくことを祈るのである。

○

さう云ふ譯で、歌舞伎芝居は苦手だけれども、文樂の方はいつからともなく好きになつた。初め私は、人形だけが好きで義太夫は嫌ひであつたが、既に人形に惹き入れられれば、義太夫に魅了されずにはゐる筈がない。尤も地唄の稽古をしたのが義太夫に興味

を覺える端緒となつたのでもあらうが、そのせむか、今でもどちらかと云ふと太夫の語り口よりは三味線の音色を聴くのを樂しむ。勿論それもほんたうの味は分らないので、しろうと耳に美しいのを樂しむのである。だから此方の通人に尋ねて、特に名人の三味線彈きが彈く時は大いに緊張して聴くのであるが、遠慮のないことを云はせて貰へば綱造の絃が一番好きである。綺麗なことゝが義太夫の三味線としては第一の條件でないかも知れぬが、兎に角私はあるの音色を最も綺麗なやうに感じ、さうしていつも恍惚とする。が、恍惚とするのは、實を云ふとその音色の故のみでなく、彼と津太夫とが肩衣を並べて燭臺を前に端坐する時の、形の上の美觀にも依る。と云ふのは、いつたい名人と云はれる程の藝人の顔は取りぐに一と癖あつて、聴衆の腦裡に強い印象をとゞめるものであるけれども、綱造の容貌は分けても印象

的であり、彼と對照される時に津太夫のそれも一段と引き立つて、両者が互ひに輝きを増す。先づ綱造の方から云ふなら、これは恐らく藝人中での有數な美丈夫の顔であらう。東西の歌舞伎、新舊の俳優を引つくるめても、これだけ整つた立派な顔は他に見當らない。白皙で、面長で、頭顱がつる／＼に禿げて光つてゐるところは山田耕笹氏を髣髴せしめるものがあるが、輪廓は耕笹氏以上にキチンとしてゐて、而も耕笹氏ほど纖弱でない。それは全體が耕笹氏より大作り、少くとも感じに於いては大作りて、頬にも相當に肉があり、且目鼻の線が強いせゐであらう。凡そ文樂の太夫と三味線彈きの中で、色の白いことにかけてはつばめ太夫と此の人とを推すが、つばめ太夫の丸ぼちやて可愛らしいのに反し、此の人の顔には一抹の冷たさと嚴しさがある。あまり端麗過ぎる顔は暖かみに乏しいものであるから、大方そのせゐもあ

るのであらうが、長年の練磨の間に一道の權威としての品格が自然に備はつて來てゐることも、見逃せない。それにしても歳はいくつぐらゐてあらうか。五十台にしか見えなけれども、その經歷と地位から察すれば六十を超えてゐるのであらうか。しかし美貌と色白のために實際より若く見えるとしても、それが決して大家らしい貫録を傷つけてはゐない。現に津太夫と並んだ時に、年配と云ひ、押し出しと云ひ、實に似合ひの一對を成してゐるのである。ところで、諸君も御承知の通り、淨瑠璃の三味線弾きと云ふものは、太夫の方が泣いたり喚いたり仰け反つたりして盛んな身振りや表情をするのに引きかへ、始めから終りまで殆ど顔面筋肉を動かすことなく、靜かに弾きつゞけてゐるのであるが、彫刻的な綱造の顔はそれ故に尙その森嚴さを加へるのである。私はいつも、此の二人の場合に限つて、津太夫の顔よりは彼

の顔の方へ一層しば／＼凝視を注ぐ。彼の顔の特長としては、
—— あゝ云ふ風に整つてゐると中々それが掴まへにくいものだけれども、一つ顯著なものがある。それは何かと云ふと、眼瞼の肉が厚く、腫れぼつたい。従つて、眼が、切れば長いが、非常に細い。だから観客はごく稀にしか彼の瞳を見ることが出来ない。私の如きも、かう書きながら彼の風貌を空に描いてみて、外の部分は思ひ出せるが、はつきり瞳を見たときと云ふ記憶がない。私は折々、彼の顔を、その重く垂れた眼瞼を視つめながら、盲人を見てゐるやうな氣になることがある。なほその外の特長を云へば、眼の下にある僅かな皮膚のたるみと、高い鋭い鼻であらう。何はともあれ、さう云ふ綱造の顔は、それだけ見てゐても美しく、覺えず襟を正したいやうな威儀に撲たれるが、彼の右側に見台を控へてすわつてゐる津太夫が又好いのである。但し此の方は美男子ではない。

悪く云へば田舎の百姓親父のやうな感じもする。以前道八や友次郎や叶などと云ふ三味線弾きが弾いてゐた時分には、此の親父の顔がこんなな映えてゐなかつたところを見ると、それは全く綱造との對照がもたらす効果にちがひない。なぜなら、此の二人は背恰好から、肉づきから、顔の大きさから、頭の禿げ工合まで、同一のタイプに屬してゐて、對照するのにまことに都合がよいのである。而も綱造の肌の白皙なのに對して、津太夫は鐵の如くに黒い。綱造の頭顱は一物もとゞめず禿げ上つてゐるが、津太夫の方は頭頂の周圍に短く刈つた白髪がほのかに光つてゐる。それだけでなく、津太夫の肉聲は豪宕であり、その淨瑠璃は男性的な太い線を以て貫かれてゐるが、綱造の風貌が玲瓏玉の如くだとすれば、津太夫のそれはブツキラボウな石ころのやうである。だが、不思議なのは、醜男である筈の津太夫が、その男前に於いて

格別綱造に見劣りしないことである。凡庸な百姓親父が俄かに堂々たる態度を示して來ることである。私は二人の姿を眺めて、何と實に揃ひも揃つた老藝人であることよと思ひ、又二人ながらほんたうに立派なおぢいさんであると思ふ。蓋し此の光景は文樂座に於ける一個の比類なき壯觀であつて、時には人形劇以上の感銘を與へるのである。

○

二三年前から、私はとき／＼此方の寄席を覗くことがある。行くのは主に法善寺境内の「花月」であるが、殆どいつも大入満員の盛況で、ぎつしり詰まつてゐる間に辛じて席を占めながら、小さな手焙りを引き寄せて茶を飲み煙草をふかしてゐると、幼年の頃父や母に連れられて人形町の末廣や茅場町の宮松へ行つた時

分のおぼろげな記憶が、なつかしくもよみがへつて来るのである。それはもう今から四十年近くも前、明治も二十年代から三十年代のことであつて、思へばその後の世の有様は随分變つたものであるが、斯く東京を數百里離れた西國の都會の盛り場へ來て、日本橋時代の寄席の空氣を味ふことが出來ようとは、實に何とも不思議な心地がするのである。正直のところ、かう云ふ種類の娛樂機關はとうに滅びてしまつてゐてもよさうであるのに、それが残つてゐるばかりか、而もその土地が大阪ではないか。あれから四十年の後に、私がかうして此の土地に流れて來てゐるのも不思議なら、こんな所であの頃の寄席にめぐり遇ふと云ふのも不思議でならない。が、それにも増して思ひがけない邂逅であつたのは、昔の朝寝坊むらくが今は圓馬と名を改めて此處のしん打ちになつてゐることであつた。私は、彼が高座に現はれ

たのを見た瞬間、ぎよつとしたと云つてもよい程に驚きもすれば、なつかしくもあつた。「明治時代の東京」がむらくと云ふ人間に化けて突然出て來たやうに感じた。それと云ふのも、最初に一目見た時は、圓馬のむらくはそんなにひどく衰へてはゐなかつたからである。こゝてちよつと餘談になるが、ゼンたい私はむらくの顔を特に覚えてゐる理由があるのだ。と云ふのは、若い時分、二十六七歳頃の私は、むらくに似てゐると云はれたものであつた。さう云ひ出したのは、偕樂園の女將、即ち我が竹馬の友笹沼源之助の奥さんであつて、當時むらくはしばしば偕樂園のお座敷へ呼ばれ、ついでに帳場で話し込んで行くことが多かつたのである。私は彼に似てゐることを別に光榮とも感じなかつたが、敢て否定もしなかつた。事實、むらくの顔を見てゐると、成る程似てゐるなと思ふ節もあつた。顔のたちや地聲の性質から云へば、私

よりはむしろ今の法制局長官金森徳次郎君の系統に屬するやうであるが、あのずぼらしい話ぶりと、へんに横着さうな表情と、それから頭髪の工合とが、感じに於いて何處か青年時代の私と共通なものがあつたのであらう。然るに花月に現はれたむらく、いや、圓馬を見れば、髪の毛は大分うすくなつて頭の頂邊に禿げが隠されてゐるらしいが、染めてゐるのかどうかまだ白いものは眼につかず、少しく頤の張つてゐる角顔の肉づきも左程に落ちず、皺もそんなには寄つてゐないので、案外若いと云ふ氣がしたのだが、だん／＼見てゐると、矢張さうでない。矢張圓馬は、もはや往年のむらくでない。第一にそれを感じさせるのは、眼の光が著しく柔和に、分別臭くなつて、あの生意氣な、狡猾さうな輝きが消えてしまつたことである。昔は何處かに「色悪」と云つたやうな、いけづら／＼しい、太々しい氣魄があつたが、今はその顔から

さう云ふ魂が抜けてしまつて、一個の好々爺になつてゐる。それに、顔よりは姿勢の方に老いが來たらしく、すわつた背中が心持ち猫背になつてゐる。あれでは高座で「鎗さび」を踊つた當年の元氣はないであらう。つまり、偕樂園の細君をして私を思ひ出させたところの共通點、一種の不良青年的な精悍さがなくなつて、昔のむらくを藻脱けの殻にしたものが圓馬になつてゐるのである。さう云ふところにしん打ちらしい貫祿が加はつてゐるやうなもの、しかし私は何とも云へぬ淋しい氣がした。その、藻脱けの殻の圓馬を見てゐると、外形的にはさう變らない一人の男を、そつくりそのまゝ老人に變へてしまつた年月の作用が考へられて、悽愴の感にさへ撲られた。むらく、いや、圓馬自身は恐らく自分のさう云ふ變化を意識してゐないであらうと思ふと、ひとしほ哀れさが募るのであつたが、ふと氣がつけば、私自身が、今では

彼との共通點を同じやうに失つてゐるのではないか。而も私は、圓馬と違つて外形的にも最早争へない老人になつてゐるのである。だがそれにしても、關西へ流れて來たのは私ばかりでなかつたのを知つては、此の老藝人との因縁の淺くないことを感じるのである。

○

圓馬についてもう一つ氣の毒に思ふのは、彼の話が此方の人にさう受けてゐないらしいことである。これは私の觀察であるから間違つてゐることを望むけれども、いつぞや、此のしん打ちの話が始まると一割か二割程の客が心なくもばた／＼と立つてしまつた。そんなことから、さうてはないかと思ふのであるが、ほんたうを云ふと私が聞いても、大阪の土地ではあの話ぶりはあ

まりサラ／＼し過ぎてゐる。さすがに今では「鎗さび」の踊りてお茶を濁すやうなことをしないで、短かくともちやんと纏まりをつけて引き退るのであるが、此の間死んだ春團治などのアクトさに比べると、あれては如何にも油ッ氣が足りない。それに、話題が今の東京ならまだしも、昔の江戸の世界とあつては、いよ／＼以て此方の人の興味を惹きにくい。さう云へば、圓馬に限らず、東京から此方へ移つて來た藝人には皆幾分かその嫌ひがあるのではないか。たとへば古朝太夫なども、私は前にも云ふ通り淨瑠璃の巧拙は分らないながら少し齒切れがよすぎるのではあるまいか。それともそんなことを思ふのは、東京生れと云ふことを人から聞いたせゐであらうか。たゞ、さう云ふ移住藝人の中で、かの市川箱登羅が今もキビ／＼した江戸辯を使つてをり、羽左衛門の助六の芝居に唯一の大阪方として馳せ參じてゐたのには、

何と云ふ譯もなく、微笑を禁じ得なかつたのである。

半袖ものがたり

○

一年ぢゆうの季節を通じて、春と秋とはこつちが優つてゐることには論はなく、冬も六甲山麓のあたゝかさを思へば、秩父嵐の肌寒さには身ぶるひが出るが、夏だけはさうでないといふ人があつた。私も長くその説に同感してゐた一人で、氣候、風土、人情、食物、何一つとして上方の方がよいと思はないものはないのに、たゞ東京の涼味ばかりは、毎年夏が来るたびに久しく忘れかねてゐた。全く、寒暖計の度盛からいふなら關西が關東より暑いことは争はれない。京都の夏のしのぎにくさは誰でも知つてゐる通りで、

61
31

四條河原の夕涼みなどといふけれども、日が落ちてからは河原にそよとの風も吹かず、嵯峨、嵐山へ逃れてみても、あのこんもりした山の影や水の色が妙にじつとりといきれてゐるやうで、見た眼にも涼しくはないのである。これは阪神地方とても同じこととて蘆屋から夙川あたりの、遠眼にもチカ／＼と射られるやうな所禿のした山肌を見ると、口の中が渴く心地がする。それに西國は、關東に比べて土の色が白いので、日中の照り返しは分けても強く、細かい灰のやうな地質が歩くにつれて熱い砂ほこりを揚げる。この土の色は大阪から神戸、須磨と、西の方へ行けば行くほどますます／＼白くなり、照り返しもまた強くなり、そのうへ夕なぎといふ現象が一層規則的に起つて、毎日必ず黄昏の長い時間を占める。まして市中はひとしほてあるから、町中は物の臭ひや夏の月」といふ句があるのは、船場や島の内邊の路地の暑さを詠

んだものではないのかと、いつもさう思ひ／＼するのである。

○

しかし私が關西の夏を堪へ難いものに思ふ理由は外にもう一つあるのであつた。それといふのは、こつちの夏は主として風が西から吹くために、西の塞がつてゐる家は必ず暑いものとされ、借家でも借り手がなるところから、大概の家が西の方に出口や窓を開けるのであるが、なるほどさうすれば風は自由に入る代りに、ともすると西日の脅威を受ける。が、生憎なことに私は平素日光に直射されるのを嫌ひ、冬も北向きの窓の下で仕事をしないと頭が冴えて來ないのである。のみならず私のやうな職業の者にとつては、あまり風通しのよすぎる部屋も、床の間の掛け軸が壁の砂土を落したり、原稿用紙がばた／＼めくれ上つたりし

て、とかく感興が亂れ易い。それゆゑ慾をいはして貰へば閑寂な僧堂の奥書院のやうな、日の目の遠い、空氣の冷たい、ひんやりとした廣間が望ましいけれども、さういふ贅澤が許されないなら、蒸し暑くとも風通しの悪い一室に閉ぢ籠つてじつと脂汗を掻きつゝ辛抱する方が、創作には都合がよいのである。されば轉宅好きの私は、居を變へるごとに書齋に充てる部屋の方角や採光の工合が氣になつたので、或る年岡本の梅林の近くに土地を購ひ、理想通りの間取りの家を普請して、もう今度こそは落ち着ける、これで長年の放浪生活にもおさらばを告げることが出来たと、さう思つたのも束の間、分不相應な費用を投じた報いには自分の貧弱な収入では邸の維持が困難になり、足かけ四年後にはその土地家屋をきれいさつぱりと人手に渡して、阪神沿線の魚崎に假りの住まひを求め、再び元の佗びしい暮らしに戻つたの

てあつたが、實はその年、昭和七年の一と夏ほど、およそ今までに暑いと思つたことはなかつた。

○

その魚崎の寓居といふのは、もとより家賃五十圓にも足らぬ借家の、多くもあらぬ間數のうち、大部分が、西に向つて窓や縁側を持つてゐて、その縁の外には前栽といふのも名ばかりな十坪程の空地に、せいゝの低い杉、樅、かなめ、山茶花、もくせい、たいざんぼくなどがこゝかしこの隅にひよろ／＼と生えてゐるばかり、あとは生々しい土の地肌があつた。白つぽい乾いた色をむき出しにしてゐた。尤もそのあたりは阪神間でも早く開けた町であつて、前もろしろも家がたてこんでゐるのであるから、家賃のことを考へると、これだけの庭を取つてあるのさへなか／＼親切なの

61
31

だけれども、でもその庭から午後の日光が座敷へいちめんに入し込むのであつた。當時二階を仕事部屋に充てゝゐた私は、晝も西側の窓といふ窓を悉く締めて、南に唯一つあいてゐた窓の下へ机を据ゑ、二月に移り住んでから、三月、四月、五月、六月と、入梅のすむころまではどうか過して來たものゝ、七月も半ば近くなつては、屋根瓦の照り返して餘りにも暑さがきびしいために、さすがに怵へきれなくなつて次ぎの間の四疊半の方の雨戸を開けた。最初はそのも、すこしだけ風を入れるつもりで、机の方へ日が來ないやうに細目に開け、陽脚が傾くにしたがつて隙間の位置を變へて行くなどしたものだけれども、だん／＼炎暑が加はるにつれて、一寸あけたのが二寸になり、三寸になり、三枚の雨戸を一枚あけ放し、二枚あけ放すといふやうにまてなつて行つた。しかしそんな風にしてても二階はいくらか優してあつたが、下

の茶の間と八疊とは、縁側から斜にさし込む日の光をどうにも防ぎやうがなかつた。殊に四時から六時過ぎまでは、活動寫眞の映寫機から出るやうな強い明りが疊から壁へ這ひ上つて來て、足の踏み入れ場もないのであつた。私は岡本の家を建てたときに京都へ詔へて作らせた簾が、それもあらかたは邸に附けて賣り拂つてしまつた残りだが、大阪の知人の藏に預けてあつたのを思ひ出して、あるだけ取り寄せて、縁側の外へ一と側吊り、座敷と縁側の境のところにもう一と側吊り、その二た側の簾を一杯に垂らして辛くも凌ぎをつけたのであつたが、あの一と夏の暑さばかりはいまだに忘れられないのである。

○

だが、それから後、去年の夏は岡本の前の邸から七八町東の山の

麓に家を借り、今年の夏は阪神沿線の打出と蘆屋との間の、舊國道に近いところに移つて來、かく年月を送るにつれて、あの魚崎の一と夏ほどには暑さがこたへなくなつたのは、いつか體がこちらの氣候に馴れてしまつたせゐであらうか。兎にも角にも今の私は、關西の夏にむしろ掬すべき情趣を感じて、その暑さゆゑになほ愛着を覺えつゝある。さういへば京の祇園祭は毎年七月の中旬の、炎天の日に行はれるのが慣例であるのに、或る年秋に延ばしてみたところ、一向祭禮の氣分が湧き立たないのみか、その年の冬市中に悪疫が流行したので、明くる年から再び夏に改めたといふ話を聞いたことがあるが、何といつても夏はせいぜい夏らしい方がよいのであつて、もし三伏の炎熱に喘ぐ苦しみがなかつたら、あの京洛の秋の魅力がどんなにか減殺されるであらう。されば昨今は麥茶と澁團扇と蚊遣線香の生活に自らな

る樂み見出をしなから、やがて涼風の訪うて來る日を心待ちにしてゐるのである。

○

大阪の人が夏着るものに「半袖」といふ一種の簡易服がある。見たところは襦袢に筒袖を附けたやうな仕立て、袖はやう／＼肘を蔽ふに足る短さ、裾も膝頭の下一二寸のところにとまり、上前と下前とを附け紐で結ぶ仕掛けであるから、帯を締める必要がない。地質はこれといふ定まつた布地があるので、何事にも費えを省き廢れた物を利用する土地柄のこととして、上布、黄平、平絹、縮、薩摩緋、久留米緋等、絹でも木綿でも、何によらずもはや使用に堪へなくなつた衣服の古ぎれを以て作る。これを着るには、下に半袖の夏シャツと半股引を着、毛絲の腹巻をするのが普通で、

素裸も同然な不恰好な姿が下から透いて見えるのであるから、餘り體裁のよいはずはなく、あのアツバツバとかいふ下女の夏服と兄たり難く弟たり難いものだけでも、丁稚や番頭はいふまでもなく、随分商店の主も着、店先での應對は勿論のこと、時にはそのまゝ注文取りなどの用たしにも出かける。私は初めて關西へ來たころ、此のえたいの知れぬ服裝に眉をひそめて、さういふ不作法な上ツ張りを着たまゝなりもふりもなく戶外を歩く町の人々を、外國人を見るやうな一種異様な眼をもつて眺め、大阪人はどこか支那人に似てゐるといふ東京側の惡口を痛切に思ひ出したのであつたが、事實、東京には半袖といふ言葉もなければ、ましてあのやうな服裝などは知られてゐない。それは恐らく、東京の夏があゝの不法法を大目に見るほど暑くないのにもよるのであらうが、さういふ事情がないとしても、もと／＼イキや

見えを貴ぶ東京の人々、殊に近ごろはインテリ趣味とかいふものが流行つて、何事にも智識階級ぶることを喜ぶあの都會の市民たちに、あゝいふ低級な庶民くさい風俗が氣に入るはずはないのである。

○

東京とても土用に入れば相當に暑い日がつゞくから、私の幼い時分などは、二十前後の女までがちやうど、芳年の繪にあるやうに浴衣の袖を腕まくりした。しかし彼らは不作法な中にも、傳法とか、鐵火とかいふことを忘れず、見た眼のすゞしさを、すが／＼しさを常に念頭に置いてゐたので、半袖のやうなぢゝむさいものを纏ふくらゐなら、はだ祖ぬぎになるか、いつそ素ツ裸になつたのである。されば女の腕まくりにも肌の美しさを誇る氣分が手傳つ

てゐたことは、近代のモダン・ガールがワンピースの袖なしを着る心と、大した違ひはなかつたのであるが、私はさういふ東京人を一方に置いて、さて大阪の半袖を見ると、また此のくらゐこちらの人の特質を露骨に示してゐるものはないやうに思はれるのである。なぜかといつて、東京の浴衣はたとひ手拭ひ地のものでも年々新しい品を買はなければならず、そのつど一反に一圓か二圓は取られるけれども、半袖は役に立たない古ぎれを始末するのであるから、費すところは裁ち縫ひをする手間だけで、それすら浴衣を縫ふほどの時間や労力がかゝるのではない。その上帯を締めずに済むといふことが何物にも優る輕便な點で、着た當人の肌ざはりのすゞしさは浴衣の比ではないのである。尤もすゞしいことをいふなら、裸に越すことはないやうなもの、まさか裸で商用にも出られないとすると、浴衣はあの通りだ

らしがなくて事務には適しないのであるが、半袖の方は結構間に合つてゐるのである。今大阪の町人があれを纏つて出歩いてゐる有様を見るのに、紙入、手帳、萬年筆等の必要品は大概腹巻の底に收め、なほそのほかの細々したものは下前の胸に附いてゐるポケットに入れて、一方の手に扇子を提げながら、或る者は當世風のカン／＼帽を冠り、或る者は絹紬張りの日傘をさして行く。その恰好は、何處か滑稽で、みすばらしくて、氣の利いたものではないことは前にも述べた通りだけれども、實利に生きる大阪人は、他人の思はくを顧慮するよりはたゞ此の簡易服の重寶さと、着心地のよさを愛さうとする。さうして一般の人々も老舗の主が半袖姿で家業にいそしんでゐるのを見ると、何となく商賣ぶりの手堅さを思つて、その人と店とを信用せずには措かないのである。

○
 ところて私が半袖といふものを自ら纏つて、つくづくその恩恵を感謝したのは、あの魚崎の忘れられない夏からであつた。當時私は何と思つてあれを着る氣になつたのであらうか。最初の妻に別れてから後、二三年來浴衣を買つたことがなく、あるに任せて着てゐるうちに、その年の夏はもはや使用に堪へるものが一枚もなくなつてしまつたのに、暑熱を犯して買ひに出るのが億劫なところから、何かあるもので濟ます工夫を案じたからであつたらうか。それともまた、分けてその年は負債の利拂ひや税金の取り立てに惱まされてゐたので、實は今いふ浴衣の金にも差支へるほどの不自由さから、大阪人のつましいやり方を見様見真似に學ばうとしたのか。或はほんの物好きからか。恐らくはそ

のいづれてもあつたのであらうが、私は平素不用の衣類を詰めてあるブリキ製の長持を開けて、あれかこれかと古着を引き出してみた揚句、先年土佐から二三匹取り寄せた地質のゴリゴリした黄平が、圖らずもまだ一反だけ反物のまゝ残つてゐたのを見つけ出して、試みに二つ仕立てさせた。さうしてそれを初めて着た日から、忽ち私は半袖の禮讃者になつてしまつたのである。

○
 見ては不恰好なものであつても、着ては嘸かし涼しいであらうことは、かね／＼想像してゐたけれども、しかしこの簡易服の餘徳は、たゞそれだけには止まらなかつた。なぜなら私は、それを着た日から敢て肉體ばかりではなく、心の上の虚飾や見えや淺はかな偉がりが除かれて、急に精神が自由の天地に濶歩し出した

のを覺えたからである。私は自分が一介の庶民であることを知り、その分限に甘んじて、謙讓の道を守るべきであることを悟つた。が、さう悟つたら貧苦も炎熱も恐るゝに足らない心境が開け、一朝にして身も魂も軽々となつて來たのである。私はSといふ友人の奥さんに頼み、金太郎が着てゐる紺の腹がけのやうなものを白の富士絹で作つて貰つて、シャツや股引を着込む代りに、それを着た上へ半袖を纏つたのであつたが、追ひ／＼暑さが加はつて來ると、その腹掛けもうるさくなつて、しまひには下帶一つの裸の上へ直かに纏ひ、真に一點のわだかまりもない胸中のすが／＼しさを、そのすが／＼しさの故に西日のさし込む借家ずまひの暑くるしさを、ひたすら楽しんだのであつた。

○

それからこつち年々夏が來る毎に私はあの時の二枚の半袖を持ち出して、代る／＼洗濯しては着るのである。されば地質のゴリゴリした硬い黄平であつたのが何十回となく洗つた／＼めに、今ではうすくしなやかになつて、それだけ肌ざはりも快く、まことに上等の越後縮にも換へ難い貴重な品になつたのであるが、朝も夕もたゞそればかりを着るところから、ついで浴衣に贅をつくす氣も起らなければ、めつたに手を通す機會もない。思へば私が上方の夏に馴れたといふのは、偏に半袖を着馴れた結果であるかも知れず、また大阪の土地と人との深い愛着を感ずる所以は、即ち半袖を愛する所以であるかも知れない。

攝陽隨筆(終)

昭和十年五月十五日印刷
昭和十年五月廿二日發行

攝陽隨筆
定價一圓七十錢

著者

谷崎潤一郎

10.5.18



發行者木田開東京市麴町區丸ノ内二丁目二番地ノ一

印刷者正木正家東京市豊島區高田南町一丁目三五七

發行所中央公論社東京市麴町區丸ノ内びるでいんぐ

五九二區 振替東京三四番 電話丸ノ内(23)五三五番

61
318

中央公論社發行書目抄

東京市麹町區丸ノ内ビルディング五九二區
振替口座東京三四番 電話丸ノ内五三五番

文章讀本

谷崎潤一郎

更紗白絹地紙裝
菊判三〇〇頁

定價一圓五十錢
送料十四錢

盲目物語

谷崎潤一郎

著者自裝和綴
四六倍判

定價一圓七十錢
送料十四錢

青春物語

谷崎潤一郎

木下奎太郎裝幀
四六判二四〇頁

定價一圓七十錢
送料十四錢

武州公祕話

谷崎潤一郎

長篇小説
近刊

柿の蒂

坪内逍遙

平福百穂裝幀
菊判三二〇頁

定價二圓五十錢
送料十四錢

荷風隨筆

永井荷風

著者自裝
四六判四九〇頁

定價一圓八十錢
送料十四錢

直木三十五隨筆集

直木三十五

黒罎子裝幀
四六判六六〇頁

定價一圓五十錢
送料十四錢

春城代醉錄

市島春城

藥叢地裝幀
四六判六〇〇頁

定價一圓八十錢
送料十四錢

文藝林泉

室生犀星

著者自裝
四六判五七〇頁

定價二圓
送料十八錢

花鳥草紙

新村出

川端龍子裝幀
四六判三八〇頁

定價一圓八十錢
送料十四錢

ドーン夕

辰野隆

黃唐紙仙紙裝幀
四六判四〇〇頁

定價一圓五十錢
送料十四錢

明治文學の片影

佐々木信綱

小村雪岱裝幀
菊判三五〇頁

定價三圓
送料十八錢

神・人間・自由

木下尚江

小川芋錢裝幀
四六判四三八頁

定價一圓七十錢
送料十四錢

無絃琴

内田百閒

小杉放庵裝幀
新菊判三二〇頁

定價二圓
送料十六錢

新聞生活二十年

伊藤正徳

總クロース裝幀
四六判六〇〇頁

定價一圓五十錢
送料十四錢

外遊斷想

尾崎罎堂

魚茶藥叢地裝
四六判四〇〇頁

定價一圓七十錢
送料十四錢

人間修行

登張竹風

津田青楓裝幀
四六判四〇〇頁

定價一圓七十錢
送料十四錢

61
318

61
318

文壇人物評論 評論集 正宗 白鳥 麻布裝 四六判四八〇頁 定價一圓五十錢 送料十四錢

議會政治論 評論集 馬場 恒吾 麻布裝 四六判四四六頁 定價一圓五十錢 送料十四錢

現代人物評論 評論集 馬場 恒吾 クロトス装 四六判五二〇頁 定價一圓五十錢 送料十四錢

政界人物風景 評論集 馬場 恒吾 レザ1装 四六判五三二頁 定價一圓五十錢 送料十四錢

政界人物評論 評論集 馬場 恒吾 中村研一裝 四六判五三〇頁 定價一圓五十錢 送料十四錢

役者藝風記 劇評集 三島 霜川 小村雪岱裝 四六判四八〇頁 定價二圓二十錢 送料十四錢

演劇巡禮 劇評集 三宅周太郎 木村莊八裝 四六判六三〇頁 定價二圓 送料十四錢

増レコード音楽讀本 野村 光一 山六郎裝 四六判八〇〇頁 定價一圓八十錢 送料十四錢

617
318

617
318

1 11 x
+
1 10
15

617
318

